

カタクラモール・ジャスコの駐車場の西側に、大きな鐘楼がひとつ建っています。ここには念来寺という寺がありました。明治の廃仏毀釈の荒波をかぶって廃寺になりましたが、唯一鐘楼が残り往時の姿をとどめています。この鐘楼は松本市の指定文化財でよく知られていますが、もうひとつ注目しなくてはならないことがあります。それは、江戸時代にこの寺が当地方における仏像制作の拠点であったことです。

1 光明山念来寺

この寺は、天台律宗の寺で、弾誓派と呼ばれる系統の僧が住持を勤めており、他の寺院にはない特色を持っていました。

『信府統記』から、その様子をみましょう。

元和5（1619）年、唱岳長音上人が開基した。「清水の大仏」といわれた阿弥陀の像があった。数代の後、明阿上人の代に寺を新しくして鐘楼を建て「時の鐘」をついた。多くの「道心者」がいて昼夜の勤行に勤めた。明阿は後に相州浄発願寺の住持になったのでその末寺になった。所々の寺院や小庵を再興して「仏像を彫刻」し、法を広めた。近隣ばかりでなく他国の人々までもが帰依するのは今の世でまれなことである。

①住持の系譜

ア 開基「弾誓」

念来寺の住持の系譜は、弾誓上人から始まります。弾誓（1551～1613）は、安土・桃山・江戸初期の僧ですが、白衣をまとい長い髪を肩まで垂らし山岳の岩屋などで念仏修行をする僧でした。尾張国に生まれ、美濃で修行の後各地を遍歴し、佐渡で弥陀説法の霊瑞（不思議な珍しいしるしのこと）を得たといわれます（後に弾誓経といわれる）。その後信濃に入り、虫倉山（長野市小川）・大町・松本・諏訪を経て相模国に行きます。塔の峰に「阿育王山光明阿弥陀寺」を一ノ沢に「無常山浄発願寺」を開き、京都へ移って大原に「一心帰命決定光明山阿弥陀寺」を開きました。

信濃では、虫蔵山・大町・松本・諏訪・飯田に足跡や関係寺院が残るといいます。大町には「弾誓寺」松川村には「雲照院」松本には「念来寺」「正念寺」（松本市寿）諏訪には「唐沢阿弥陀堂」飯田には「阿弥陀寺」などです。

彼が開いた浄発願寺は、岩窟から始まったといいますが、4世空誓のときに幕府や尾張藩などと関係を深め発展し、伊豆・相模・武蔵・信濃・佐渡に18の末寺を持つようになります。松本の念来寺もその有力な一つでした。念来寺の住職には浄発願寺の住職だった者が何人もいます。

弾誓は「十方西清王法国光明満正弾誓阿弥陀仏」、その跡を継いだ但唱は「念来称帰命山但唱大聖人」といいました。念来寺の開山になる長音は但唱の弟子になりますので、「光明山念来寺」という山・寺号は、師であった弾誓と但唱の法名の一部をとったものと考えられます。

イ 歴代の住職

わかっている念来寺の住職を上げると

- 開山：唱岳長音（延宝6年8月16日死去 浄発願寺三世）
- 二世：安嶽言正（寛文4年10月18日死去）
- 三世：専応源故（寛文8年6月18日死去）
- 四世：一嶽夢幻（延宝4年10月3日死去）
- 五世：西嶽教信（延宝8年6月30日死去）
- 六世：空幻明阿（中興 浄発願寺七世）
- 七世：順端雪阿（正徳5年12月21日死去）
- 八世：実明相阿（享保20年5月10日死去 松本安原生まれ）

- 九世：寂明空阿（浄発願寺13世 松本横田生まれ）
- 十世：円覚俊明英阿（明和8年4月25日死去）
- 十一世：大応智潤周阿（文化14年2月4日死去 松本梓川楡生まれ）
- 十四世：円純融覚通阿（寛政元年6月13日死去）
- 二十一世：顕蓮社円応全光信阿（明治18年7月17日死去 念来寺の最後の住職）

（宮島潤子『信濃の聖と木喰行者』）

次に『信府統記』の記述にあった言葉に注目して、それを検証してみましょう。

②「清水の大仏」

念来寺に大きな仏像があって「清水の大仏」と呼ばれていたことは、今に残るその姿をみれば納得がいきます。念来寺が廃仏毀釈にあったとき、寺にまつられていた仏像は運び出され幕府領へ移って保存されました。和田の境地区にある西善寺さいぜんじには、運び込まれた仏像などが大切に保存され信仰されています。運んできたものあまりに仏像が大きくて、光背の一部を切らないとおさまりませんでした。

西善寺にある仏像は「木造阿弥陀三尊像」「木造延命地藏像」「木造弾誓像」「铸造善光寺三尊像」で、ほかには浄発願寺4世空誉筆の「南無阿弥陀仏」の名号軸、水野家のお抱え絵師であった笹田常住の筆になる大判の紙本着色「釈迦涅槃図」、藩主水野忠周筆「南無阿弥陀仏」の名号刻字額などで、念来寺に関わるものです。



木造阿弥陀如来及び両脇侍三尊像
木造地藏菩薩半跏像



水野忠周筆名号刻字額



紙本着色釈迦涅槃図 部分

（いずれも『新編 松本のたから』松本市教育委員会 掲載の写真から）

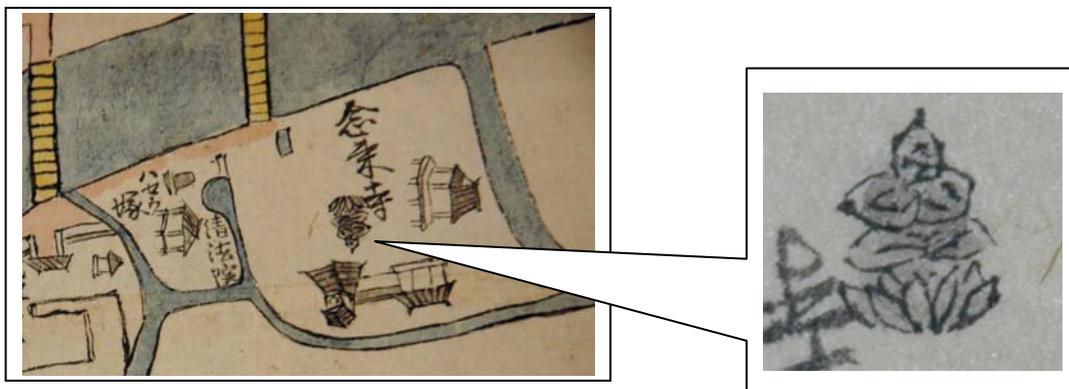
③「仏像を彫刻」

①であげた住職たちのなかに、弾誓の教えを守り作仏に長けたり熱心だったりした人たちが何人もいました。その人たちが造った仏像が松本藩領や諏訪藩領のお寺にまつられています。その一覧を掲げます。

仏像名	僧名	製作年代	所 在
①木造阿弥陀如来坐像 (脇侍 観音・勢至)	長音	(明阿再興ともいう)	松本市和田 西善寺 (旧念来寺蔵)
②木造阿弥陀如来立像	長音		池田町広津
③木造延命地藏菩薩坐像	明阿	正徳元(1711)	松本市和田 西善寺 (旧念来寺蔵)
④阿弥陀如来光背	明阿	享保7(1722)	同上
⑤木造地藏菩薩立像	明阿		松本市寿 正念寺
⑥木造阿弥陀如来坐像	明阿	元禄11(1698)	北安曇郡松川村 雲照院
⑦木造観音・勢至菩薩立像	明阿	享保9(1724)	同上
⑧木造弾誓上人立像	相阿		松本市和田 西善寺 (旧念来寺蔵)
⑨木造阿弥陀如来半跏像 (脇侍 観音・勢至)	相阿	享保9(1724)	松本市寿 正念寺
⑩木造地藏菩薩立像	相阿		北安曇郡松川村 雲照院
⑪木造伝長音上人坐像	寂阿	元禄13(1700)	大町市 弾誓寺
⑫木造弾誓上人立像	昭阿	延享3(1746)	松本市寿 正念寺

(仏像の年代比定は『松川村の文化財』⑥⑦「光明山念来寺常什物記」④⑨
『新編松本市のたから』③⑨⑫『謎の石仏』(宮島潤子)⑪による)

このように、江戸初期から中期にかけて造られた仏像が残っています。そのいくつかは大型なものです。これらの仏像が念来寺の関係の僧によって制作されたということは、従来松本地方の人々にあまり知られていませんでした。平成19年に市制施行百周年を記念して松本市美術館で開催された「松本平の神仏ひやくはしらをたてる」と銘打った神像・仏像関係の展示で日の目をみて、念来寺の僧が関係する仏像制作に注目があつまりました。ですが、どのようなシステムで仏像が製作されていたのかについてはわかっていません。寺内に工房があったと思われませんが、寺外の仏師との関係もみていく必要があります。現存している仏像の調査とともに、念来寺を中心にした松本における江戸時代の仏像制作の解明が進むことを願うものです。



上図の「文化5年から天保6年頃松本城下絵図」に描かれた念来寺域をみると、本堂と鐘楼があり、鐘楼につながるようにならべて建物が描かれています。本堂の前に何か描かれています。蓮弁の上に座る仏様のようです。「念来寺常什物記」には「唐金鑄観世音菩薩 御長座像五尺 明阿御作 右寺中本堂前安置 元禄八亥年百番順礼供養仏也 宝

冠弥陀如来立像八寸明阿和尚御自鑄ナリ」とあります。鑄造された5尺の観音菩薩坐像が本堂の前にあったという記録です。絵図にえがかれているのはまさにこれではないかと思われまゝです。明阿作とありますし、観音菩薩の宝冠につけた阿弥陀如来は8寸のたけで明阿が自分で鑄造したともありますので、木造だけでなく鑄造の仏像も念来寺関係では作られていたこととなります。念来寺境内に鑄造の仏像があったことは後世の人の口には上っていませんが、これも今後解明していく必要がありそうです。

④「多くの道心者」

大型の立派な仏像が制作された一方で、各地のお堂などのなかに木片に仏の姿を簡単に刻んだだけの仏像をみるのが多くあります。これは木食もくじきと呼ばれる僧が作ったものです。木食とは米穀を断ち雑穀や木の実・草の根・山菜を生で食べて修行することで、僧の修行形態の一つでした。弾誓の流派はそれをひいています。木食の僧は全国にいました。木食僧として有名な人に木食もくじき 其おうご（近江の人 秀吉の帰依をうけて高野山金堂などを建立再建）木食もくじき 五行ごぎょう（甲斐の人 江戸時代後期に千体仏を造ることを祈願して全国を遍歴）などの人がいます。木食僧が刻んだ仏像は木の中に仏性を見る形で刻まれているため、従来の形式を踏んだ仏像とは異なる斬新な姿形があり、現代に多くのファンがいます。

念来寺にも木食を名乗る僧がいます。その人の名は木食もくじき 山居さんきよ（故信、故真とも）。彼は明暦3（1657）年に山辺の新井（松本市）に生まれました。13歳の時に子守をしていた幼児を誤って井戸に転落死させてしまい、自殺しようとしたところを念来寺の僧に諭され、16歳で仏道に入ったといひます。彼は29歳の時、虫倉山にこもって木食行と年間を単衣ひとえで過ごす単衣行の修行をするとともに作仏さくぶつをし、多くの木仏を残しました。かれの木食仏には背面に「万之内山居作」とか「千ノ内空幻和尚為也」とか記されています。空幻は念来寺の中興六世明阿のことです。山居が木食の修行だけでなく作仏をしたのは、本人の才はもちろんのこと念来寺にあった作仏の寺風が影響しています。彼は小川村（現長野市）の高山寺三重塔の修復や仏像の制作、大町市の若一王子神社の観音堂や三重塔の建立にも深く関わっています（『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻歴史編下 『百柱をたてる』）。また、大町の弾誓寺の住職になっています。

仏道を修めようとする人々が多く念来寺に集まっていたなかに、山居のような人もいました。

⑤「時の鐘」

念来寺では、時の鐘が撞かれました。松本城下ではお城の太鼓櫓で時を知らせ、念来寺でも時を知らせました。宝暦4（1754）年の記事に太鼓櫓と念来寺で正午に半鐘を打つとあります（『史蹟松本城太鼓門枳形復元報告書』）。時の鐘は明治になっても続き、大正4年には城山公園に午砲が設置されて時を知らせるようになりますが、その後もこの鐘が大正10年まで撞かれていたといひます（旧版『松本市史』）。

「念来寺ぶつじょう 鐘の音は三里四方」という言い伝えがあつて、この鐘の音を聞くことができる範囲の人々は米穀を集めにまわる寺の人に喜捨し、鐘を撞く労に感謝し仏への供養としたといひます（仏餉とは仏に備える米飯のこと）。念来寺のほかには時の鐘を撞いた寺として、正念寺（松本市寿 諏訪領）弾誓寺（大町市）恭儉寺（松本市梓川）がありました（田中磐「旧念来寺鐘楼と時の鐘」『安筑史談』）。

⑥「近辺ノ庶衆ヲ始メ他国マテモ帰依」

本尊が「清水の大仏」と呼ばれ、念来寺へ行く路は「桜さくら 河岸かたし 小路」と呼ばれる二十四小路の一つとなっていたように、この寺へは参詣にさまざまな人が訪れたようです。『信府統記』ではそれを、今の世では稀有なことだと記しています。多くの寺が藩主とのかかわりのなかで創建や存続していたことに比べると、いわば庶民の人々の信仰で成り立っていた寺であり、特異な存在の寺であったといえます。

安楽寺を第一番にして始まる「松本三十三番」の3番目が念来寺で、その御詠歌は

「此の寺の庭の清水をくみてしれ すゝしき国に住める心も」でした。

2 念来寺の鐘楼 — 軒に雲形の模様は全国最古の部類 —

今に残る鐘楼は、市内屈指の規模で、松本市の指定文化財になっています。宝永2（1705）年、水野氏時代に檜材で建立され、宝暦9年には屋根を銅瓦に葺き替えたといわれます。鐘楼建築の大工としては、摂津国大坂四天王寺椀皮衆和泉守藤原家次、中村善兵衛、中野武兵衛、中野伝六の名があります。銅屋根師には武州埼玉郡光田想七の名が残っています（『長野県史』美術建築史料編全1巻（2）建築）。

高さ12.67m、袴腰の裾部分は7.8m、楼の床は地上から4.4mの高さのところにあります。入母屋造で、屋根の勾配は緩く軒が深くなっていて堂々とした趣をかもし出しています。楼の上の鐘を釣る場所は桁行（南北方向）3間、梁間（東西）2間で吹き放ちになっており、楼の下は下見板を張った袴腰になっています。

軒裏は板庇でそこに雲形の彫刻が一面に施されており類例が少ない形式です。この形式では現存例では念来寺の鐘楼が全国で最も古い部類のものであるといわれています。雲を刻むのは、大町の若一王子神社観音堂内の厨子の軒裏や正念寺や雲照院の阿弥陀如来像の台座にもあって、念来寺系の彫刻のテーマかもしれません。

内部に上ることはできませんが、格天井に釣座と方位盤が付いて釣鐘が下がっていました。釣鐘は松本の鋳物師田中伝右衛門吉繁が中心になって元禄12（1699）年に鋳造したものです。時の鐘として時刻を知らせるだけでなく、非常時であることを人々に知らせる役目もしました。江戸時代と明治の大火に早鐘が撞かれ、熱をもった鐘に水をかけたため、傷を生じたといわれています。太平洋戦争時に勾欄の擬宝珠とともに供出を余儀なくされました。

この鐘楼の脇に、正行寺の塔頭であった妙勝寺が新しく本堂・庫裏を建築し、墓地とともに鐘楼の維持管理も行っています。



西側からみた念来寺鐘楼



板軒の雲形の彫刻

鐘楼以外にあった建物などを、河辺文書中の享保21年「山家小路寺院境内間尺帳」からあげます。これをみても規模が大きな寺であったことがわかります。このうち「剋屋」は別の史料に「刻屋」とあって、ここで仏像が制作されていたと思われます。

建物等	東西の間数	南北の間数	軒高
本堂	11間	7間	3間
剋屋	9間	6間	2間2尺
廊下	3間	5間	2間2尺
庫裏	9間	12間	2間1尺5寸
下庫裏	3間	5間	
鐘楼堂	2間	3間	4間5尺

同廊下	長さ 6 間半幅 6 尺		7 尺
寮	3 間	5 間	9 尺
	4 間	4 間	9 尺
	5 間	3 間	1 丈
土蔵	2 間	3 間	1 丈
物置	3 間	2 間	8 尺
	2 間半	2 間	8 尺
鎮守諏訪大明神			
橋	長さ 1 5 間幅 8 尺		
敷地	5 2 間 4 尺	5 2 間	
川より北山門までの道	長さ 1 0 間幅 3 間		